一【読解】次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

その日、彼は夕方というには少し間がある時刻にバスに乗っていた。取引先の重役の家に不幸があり、彼は出入り業者の営業責任者として、通夜の準備の手伝いに行くところだったのだ。

ターミナル駅からはタクシーで行くつもりだったが、時間に多少余裕があったこともあり、ファクシミリで送ってもらった略図がバスの停留所からになっていたこともあって、バスで行くことにした。

バスに乗るのは久しぶりだった。都内のマンションに住む彼は、通勤には電車を使うだけであり、仕事ではタクシーと地下鉄でほとんど用が足りていた。

乗客の大半は女性か老人で、あとは制服姿の中、高校生がいるだけだった。彼がバスに乗り込んだ時、席はまだ二つ、三つ空いていたが、あえて座らなかった。座ったあとで、席を譲らなければならなくなるのがいやだったからだ。譲ることがいやなのではなかった。

譲るべきかどうか悩まなくてはならないこと、席を立っても相手が素直に座ってくれずバツの悪い思いをすること、さらに自分が譲ることでその近辺に座っている人たちに小さな罪悪感を覚えさせてしまうことがいやだったのだ。だから、1 彼は電車の中でもめったに座ることがなかった。

彼は降車口の近くに立って、壁面に貼られている結婚式場やエステティック・サロンの広告を眺めていた。

その時、不意に声がした。

「これ、もらっていただけませんか」

それはごく穏やかな声だったが、静かなバスの中ではことさら大きく響いた。

彼が声のする方に眼をやると、降車口より少しうしろの二人掛けの席に品のよさそうな老女が座っており、手に半分に切られた太い大根が握られていた。そして、その隣には、すぐ前の一人掛けの席にいる少女の母親と思われる女性が座っていた。どうやら、老女がその若い母親に大根をあげようとしているらしい。

2 唐突なことに若い母親が戸惑っていると、老女は弁解するように言った。

「ひとりなもので、一本では多すぎるんですよ。でも、一本でなければ買えないし……」

若い母親があいまいに頷くと、老女はまた言った。

「これ、もらってくださると助かるんですけど」

「いえ、でも……」

たぶん、その老女はターミナル駅のどこかの食料品売り場で買い物をしてきたのだろう。そこで大根を一本買った。それはひとり暮らしの生活ではもてあますほど太くて長い大根だったが、その売り場には一本単位でしか売りに出ていなかった。いや、もしかしたら、その老女は、たとえ半分売りがあったとしても、大根は一本で買いたいという思いがある人だったのかもしれない。そして、ビニール袋に入れる際、あまりにも長いため半分に切ってもらっておいた……。

彼はすぐに視線をまた広告に戻したが、その老女を見て母親を思い出さないわけにはいかなかった。彼の母親もまた、大根は一本でしか買いそうもないタイプだったからだ。

母親は東京から一時間ほど離れた地方都市に住んでいた。父が死んでからは古い借家にひとりで暮らしている。狭いマンションで一緒に暮らすよりは気楽だろうと思い、また、母親自身もそう言うのでひとりで暮らしてもらっている。

しかし、ひとりで暮らすということは、日々の生活の中で、この老女のように大根の半分をどうしようかと悩むことでもあったのだ。彼は初めて母親がひとりで暮らしているということの意味が理解できたように思えた。これまでは、あえてそのことは考えないようにしてきたところがあったのだ。

「もらっていただけませんか」

老女がまた言った。

「ええ、でも……」

若い母親のためらいの言葉を耳にしながら、**3** なんとかもらってくれればいいが、と彼はひそかに願っていた。

「ひとりだとこんなには食べ切れないんですよ」

若い母親は、ようやくもらうべきだと判断したらしく、どういうことになるのかと振り返って見つめていた少女に、いただこうかしら、と相談するように言ってから、老女に向かって訊ねた。

「ほんとにいただいちゃって、いいんですか？」

「どうぞ、どうぞ」

「それじゃ遠慮なく」

すると、老女は嬉しそうに言った。

「無駄にならなくてよかったわ」

そのやりとりを聞いて、彼だけでなく、バスの中にホッとした空気が流れたのがわかった。

老女は前の席に座っている少女に声を掛けた。

「おいくつ？」

「九歳」

「まあ、大きいのね」

老女はそう言うと、ひとりごとのようにつぶやいた。

「うちの孫の方がひとつお姉ちゃんだわ」

その瞬間、彼の胸が痛んだ。自分にも十歳の息子がいる。その老女が自分の母親でもよかったのだ。

あるいは、自分の母親も買い物をするたびに大根の半分に心を悩ませているかもしれない。そうした意味では、自分が親子三人で送っている安定した東京での生活も、離れて住む母親にいくつもの小さな悩みを押しつけることで成り立っているといえなくもないのだ。

もちろん、母親は一緒に暮らそうと言っても断るだろう。しかし……とバスの中で彼は思っていた。

4 自分は、席を譲るべき人が目の前に立っているのにもかかわらず、気づかぬふりをして狸寝入りをするような男とほとんど同じことをしているのではあるまいか、と。

（沢木耕太郎『彼らの流儀』より）

〔設問〕解答はすべて、別紙の解答用紙の解答欄におさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

問一　――線部１「彼は電車の中でもめったに座ることがなかった」について、その理由を説明しなさい。

問二　――線部２「唐突なこと」とは、どんなできごとですか。説明しなさい。

問三　――線部３「なんとかもらってくれればいいが」と「彼」が願ったのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問四　――線部４の部分で、「彼」はどのようなことをいいたかったのだと思いますか。あなたがそう考えた理由も含(ふく)めて百字から百二十字で答えなさい。